こんな時代だった
平安時代末期→鎌倉時代

日本初の武家政権が誕生

平氏滅亡、源氏が武士の頂点に

現在の京都府京都市にあたる場所には、平安時代に平安京という都がありました。いまでいう日本の首都で、天皇や貴族を中心にした朝廷が政治をおこなっていました。

平安時代末期、都では貴族の警護役だった武士の存在が目立ち始めます。このころ、天皇家や貴族同士で権力争いが起こり、それぞれの勢力が武士を味方につけて武力で敵対勢力をたおそうとしたからです。

武士には平氏と源氏というふたつの大きな勢力がありました。平氏の棟梁(一族の統率者)・**平清盛**は、源氏との勢力争いに勝利し、強大な権力を手にします。武士として初めて政治の実権をにぎり、天皇や貴族の権威をもおびやかすようになりました。

しかし、思うがままに政治をおこなう清盛ら平氏一族に対し、朝廷だけでなく同じ武士のあいだからも不満が出始めました。業を煮やした天皇や貴族は、ついに平氏打倒の声をあげます。そのよびかけに応じた武士のなかに、かつて清盛によって伊豆国(現在の静岡県)へ流された源氏の**源頼朝**がいました。こうして平氏と源氏による戦い(源平合戦)が始まり、頼朝は弟の**源義経**らと協力し、壇ノ浦での戦いでついに平氏を滅ぼしたのです。

幕府の実権をにぎった北条氏

平氏を滅ぼし、新たに武士の頂点に立った源頼朝は、源氏の棟梁として鎌倉に幕府をひらきます。日本初の本格的な武家政権(鎌倉幕府)が誕生し、このころから鎌倉時代が始まります。

鎌倉幕府で源氏の血筋が政治をおこなったのは、初代将軍・頼朝のみでした。頼朝の死後、幕府の実権をにぎったのは北条氏です。頼朝の正室の父で、有力な御家人(将軍の家臣)のひとりだった北条時政は、将軍の補佐役である執権の職につきます。そして、頼朝(源氏)の血筋が3代で途絶えると、名実ともに北条氏が代々執権として幕府を動かしていったのです。

第8代執権・**北条時宗**の時代には、ユーラシア大陸の大国・元(モンゴル帝国)が2度にわたり日本に侵攻してきました。世にいう蒙古襲来(元寇)です。時宗率いる幕府軍は、元軍を2度とも撃退します。しかし、戦の恩賞が少ないことなどに不満をもった武士たちは、しだいに幕府に不信感をいだくようになっていきました——。

*赤字の武将は、第1章で大きく紹介している武将です。

くわしく見てみよう！

鎌倉幕府のしくみ

将軍
幕府のトップ。初代・源頼朝の血筋は3代で途絶えた。

第4代からは、京から藤原氏や皇族を将軍にむかえた！

執権
将軍の補佐役。1203年ごろから実質的な幕府のトップ。

地方

六波羅探題
京の警備や朝廷の監視などを担当。

守護
諸国の軍事・警察を担当。

地頭
荘園の管理や年貢の取り立てなどを担当。

鎌倉(中央)

侍所
軍事・警察を担当。

政所
政務・財政を担当。

問注所
裁判などを担当。

北条氏
(16代にわたり執権をつとめる)
初代執権・時政　第2代執権・義時
第3代執権・泰時　第8代執権・時宗 ほか

武士の二大勢力

源氏 対立 平氏

源氏 → 幕府をひらく
平氏を破り、鎌倉に幕府(武家政権)をひらく。

平氏 → 源氏に敗れ滅亡
1185年の壇ノ浦の戦いで源氏に敗れ、滅亡。

鎌倉幕府の位置

これら以外にも、諸国に守護・地頭が置かれた。

おもな出来事

- **1156年** 保元の乱。天皇家や貴族の権力争いに平氏・源氏の武士が加わる。
- **1159年** 平治の乱。平清盛率いる平氏が源義朝率いる源氏を破る。
- **1167年** 平清盛が武士で初の太政大臣(公家の最高の職)となる。
- **1185年** 壇ノ浦の戦い。源頼朝率いる源氏が平氏に勝利。平氏は滅びる。
- **1192年** 源頼朝が征夷大将軍になる。このころ鎌倉幕府が成立する。
- **1199年** 鎌倉幕府で御家人たちによる13人の合議制が始まる。
- **1203年** 北条時政が鎌倉幕府の初代執権となる。
- **1221年** 承久の乱。鎌倉幕府軍が後鳥羽上皇軍(朝廷軍)を破る。
- **1274年** 蒙古襲来(元寇)＝文永の役。鎌倉幕府軍が元軍を撃退する。
- **1281年** 2度目の蒙古襲来＝弘安の役。鎌倉幕府軍が再び元軍を撃退する。
- **1333年** 後醍醐天皇、足利尊氏(高氏)らが鎌倉幕府を滅ぼす。

宿敵・平氏を滅ぼした源氏最強の武将！

源義経

みなもとのよしつね

ひとめでわかる！

源義経の生涯

1159年 －1歳－	京に生まれる。平治の乱で平氏に捕えられる（のちに鞍馬寺に送られる）。
1174年 －16歳－	鞍馬寺を脱出。奥州藤原氏を頼り、平泉（現在の岩手県）へむかう。
1180年 －22歳－	兄・頼朝のもとにかけつける。
1185年 －27歳－	壇ノ浦の戦いで平氏を滅ぼす。
1189年 －31歳－	頼朝に追われ、奥州藤原氏を頼ったが、裏切られて自害。

強すぎて兄・頼朝にうとまれる

源義経は義朝の子で1159年生まれ。頼朝の腹ちがいの弟にあたります。平治の乱ののちに父・義朝が殺されたとき、出家を条件に命をたすけられ、京の鞍馬寺にあずけられました。成長した義経は寺を抜け出して奥州の藤原秀衡のもとに身を寄せます。やがて兄・頼朝が挙兵するやその陣にかけつけ、涙の対面をはたしました。兄・範頼とともに頼朝の代官として西国にむかい、兄のライバル・源義仲をたおし、さらに一ノ谷で平氏に大打撃をあたえました。

ところが、勝手に後白河上皇から官職を受けたために頼朝との関係が悪化します。屋島、壇ノ浦で大活躍をして、1185年に平氏を滅ぼしますが、頼朝の怒りは解けません。ついに義経は頼朝と戦う決意を固めますが、味方は少なく、再び奥州藤原氏を頼ります。ところが、藤原秀衡の子・泰衡は頼朝に強要され、義経を襲撃。失意のなか、義経は自害しました。

数々の伝説がある生涯

義経の生涯は、その悲劇性もあってか、数々の伝説にいろどられています。武将としてのセンスは抜群で、一ノ谷の戦いでは、「ひよどり越え」という平氏の背後をおそう戦法で大勝利をおさめました。

義経の戦法は武士の正攻法とは大きくちがったもので、鞍馬寺の天狗に武芸を習ったという伝説が生まれました。しかし、勝っても鎌倉武士の称賛は得られず、屋島の戦いでは御家人の梶原景時と衝突。景時が義経の行動を悪く伝えたため、頼朝の義経に対する不信感はさらに高まったといわれています。それでも民衆の人気は高く、現代でも源平争乱期屈指のヒーローとしてよく知られています。

義経の関連人物

頼朝のいとこでライバル 源義仲

源氏のなかで最初に京に入りながら、後白河上皇にきらわれ、頼朝がさしむけた義経らに敗れた源義仲。倶利伽羅峠の戦いでは、角にたいまつをつけた牛の群れを突撃させる火牛の計で平氏の大軍を破ったという。

出身地：武蔵国（現在の埼玉県）といわれている。
生没年：1154〜1184年
主君：なし

家紋をチェック！

源氏家紋

笹竜胆

19ページ参照。頼朝の弟・義経の家紋も笹竜胆とされる。義経一行をえがいた歌舞伎の『勧進帳』でも、源氏の象徴として義経の帯の紋に使われている。

今を生きるキミたちへ！

義経が教えてくれること

常識にとらわれず、大胆になれ

義経の戦いの特徴は、常識破りともいえる思い切りのよさです。屋島の戦いで梶原景時とぶつかったのは、「逆櫓」の是非についてでした。ふつう船には退却するときに備えて逆櫓をつけますが、義経は絶対に後退しないから不要だと主張したのです。そんな義経を景時は「いのしし武者」とののしりましたが、結果は義経の大勝利。常識にとらわれすぎると、成功は得られないということでしょう。

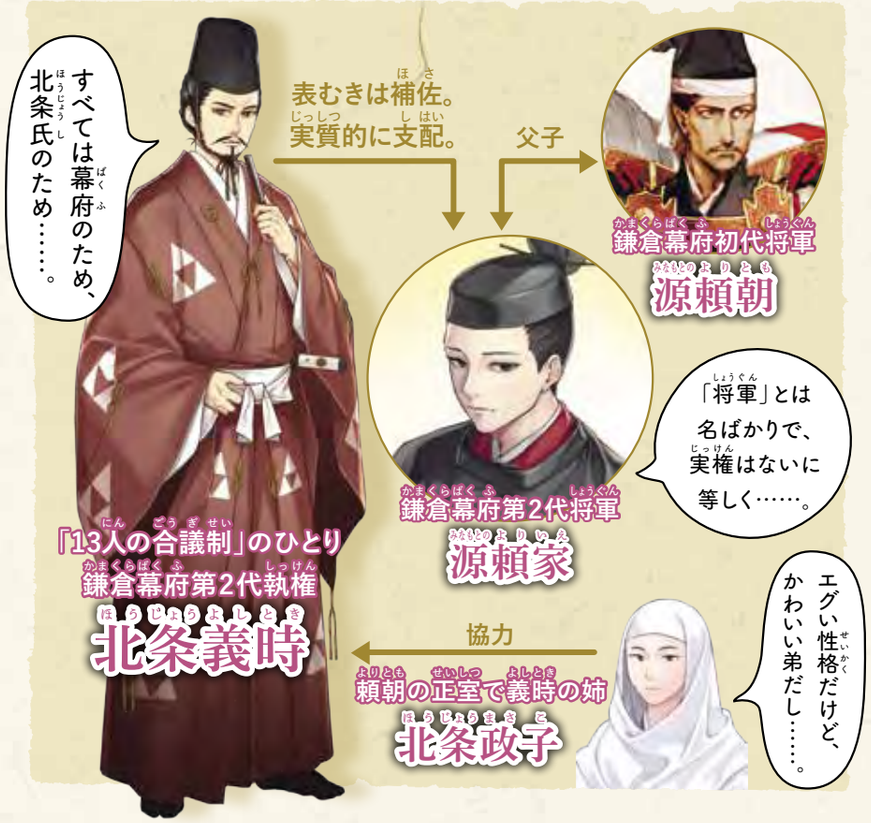
鎌倉幕府を動かした『13人の合議制』とは？

源頼朝の死後、鎌倉幕府の政治の実権は子の頼家から13人の有力者の手に移りました。一体、なぜでしょうか。

権力をうばわれた頼家

源頼朝（→18ページ）の死後、第2代将軍となった源頼家（→22ページ）ですが、訴訟をみずから裁く権限をうばわれ、幕府の政治は有力者13人の合議によって進められることになりました。これによって権力を強めたのが北条時政と義時（→24ページ）の父子です。ふたりはライバルの御家人たちを次々に滅ぼしていきました。

頼家の父・頼朝は、武士による政治を始めた偉大な武将で政治家、そして独裁者でした。訴訟があれば、もちろんすべてみずから裁きます。その頼朝が世を去り、跡を継いだ頼家はまだ18歳の若者です。周囲の人々から少々頼りなく見えたとしてもしかたがないでしょう。そこで、有力な御家人たちが集まって、頼家の権力をうばってしまったのです。もっとも、この合議制は若い頼家をたすけるためだったという説もあります。



生き残りをかけた死闘

大きな権力をにぎった13人は、このあと、たがいに激しい権力争いをくりひろげます。ただし、13人のうち、大江広元、中原親能、三善康信、二階堂行政の4人は武士ではなく貴族出身の役人なので、武力で戦うことはありません。また、足立遠元、安達盛長、八田知家、三浦義澄は早くに死んでしまったので、その活動はあまり目立ちませんでした。争いはおもに、残る北条時政・義時父子、梶原景時、比企能員、和田義盛らでおこなわれました。

5人のうち、まず退場したのは、頼朝の側近中の側近だった梶原景時です。景時はその非を有力御家人たちによって頼家にうったえられ、鎌倉から追放のうえ殺されました。御家人のお目付け役だった景時はもともと御家人たちからにくまれていましたが、この事件の裏には北条父子がいたと思われます。

次は、頼家の後ろだてで北条氏の最大のライバル・比企能員です。時政は頼家が重病におちいったすきに能員を罠にはめ、殺します。さらに比企一族も滅ぼしてしまいました。回復してことを知った頼家は怒り、北条氏を討とうとしますが、逆に伊豆に追放され、北条氏の放った刺客に殺されます。

ここまで力を合わせてほかの御家人たちを滅ぼしてきた時政と義時でしたが、ふたりのあいだにも亀裂が生じます。義時は時政が第3代将軍・実朝の暗殺を計画していることを知り、実朝をたすけ出すとともに、時政を引退に追いこみました。

残るは侍所の長官・和田義盛です。義時は義盛をたくみに挑発し、挙兵に追いこみます。そして激戦の末、義盛を滅しました。こうして義時は並ぶもののない権力を手にしたのです。

評定衆に引き継がれる

13人の合議制は、結果から見ると、北条氏の独裁権力をつくり上げるためにあったように思われます。実は13人が一堂に会しての合議は一度もおこなわれず、安達盛長や三浦義澄の死とともに完全に解体します。しかし、そのしくみは、のちの鎌倉幕府や室町幕府の評定衆（→35ページ。執権、あるいは管領のもとで訴訟・裁判を合議する役職）に引き継がれました。

鎌倉幕府 13人の合議制のメンバー

- **梶原景時**　頼朝に信頼され、御家人たちの統制にあたった。
- **比企能員**　頼家の側室の父で、北条氏と対立した。
- **和田義盛**　三浦氏の一族。武勇にすぐれ、頼朝の平氏討伐に参加した。
- **足立遠元**　武蔵国（現在の埼玉県など）の武士で、公家に知人が多くいた。
- **安達盛長**　頼朝が流人だったころから仕え、鎌倉幕府の創設にもかかわった。
- **八田知家**　下野国（現在の栃木県）の武士で、早くから頼朝にしたがった。
- **三浦義澄**　相模国（現在の神奈川県）の武士で、頼朝をささえた。
- **北条時政**　北条政子の父。頼朝の側近となり、平氏討伐の挙兵に参加した。
- **北条義時**　時政の子。頼朝に信頼され、のちに鎌倉幕府第2代執権となる。
- **大江広元**　京の貴族出身の役人のなかでは、もっとも重用された。
- **中原親能**　法律関連の役人で、朝廷との交渉にあたった。
- **三善康信**　母が頼朝の乳母の妹で、流人だったころの頼朝をささえた。
- **二階堂行政**　文筆関連の役人で、鎌倉幕府の法令の制定にたずさわった。

武将大合戦 5

1600年

関ケ原の戦い

徳川家康VS石田三成！ 天下分け目の大合戦

合戦のなりゆき

合戦データ

豊臣方（石田三成ら）
戦力 8万4000

VS

徳川方（徳川家康ら）
戦力 9万

場所

美濃国関ケ原
現在の岐阜県関ケ原町

ここが戦いの現場！

松尾山は、関ケ原の戦いで豊臣方を裏切った小早川秀秋が陣を張っていた山。標高約293メートルで、関ケ原町の南西に位置する。山頂からはかつての古戦場(現在は市街地)が一望できる。

天下をねらう家康に忠義者・三成が挑む

全国の武将が、徳川家康(→120ページ)率いる徳川方と石田三成(→122ページ)率いる豊臣方に分かれて争った関ケ原の戦いは、日本史上もっとも有名な戦いのひとつです。

豊臣秀吉(→104ページ)が世を去り、次の天下人の座をねらう家康は、1600年6月、自分に反抗的な態度を取る陸奥国(現在の福島県)の上杉景勝を討つべく東北地方へ軍をむけました。一方、秀吉亡きあとも豊臣政権の存続を願う三成は、日に日に勢力を増す家康をこころよく思っていませんでした。そこで三成は、家康が東北地方へむかうと、反徳川派の武将を集め、総大将に毛利輝元(→124ページ)を立てて大坂で挙兵しました。その知らせを受けた家康は、三成と不仲だった福島正則(→134ページ)らを味方につけ、大坂に引き返します。

9月、両軍は関ケ原の地で相対しました。三成率いる豊臣方は、家康率いる徳川方をうまく囲むように陣取りました。豊臣方がやや有利な戦いでしたが、結果は徳川方の勝利に終わります。この戦いの直前に、家康に内通していた小早川秀秋(→128ページ)と吉川広家が豊臣方を裏切ったからです。

いざ戦いが始まると、広家の軍は動かず、秀秋の軍はすぐ近くに布陣していた三成の盟友・大谷吉継勢を襲いました。豊臣方の軍勢は有利な状況から一転、大敗を喫したのです。

結果

大勝利!!

敗れた三成は、その後捕えられ斬られた。家康のたくみな調略で戦況がひっくり返り、あっけなく決着した大合戦だった。